

[最近のトピックス]

安静時唾液分泌量と口腔水分計の測定値について

村田 幸枝, 広瀬 弥奈

北海道医療大学歯学部口腔構造・機能発育学系 小児歯科学分野

う触の発生に深く関与している唾液の分泌量の測定には、安静時唾液分泌量を測定する場合と刺激唾液分泌量を測る場合とがある。前者で用いられる方法として、排液法、吐出法、吸引法、綿球法があり、後者では、咀嚼刺激法、味覚刺激法がある。また、粘膜湿潤度の検査法として口腔水分計による水分量の測定がある。今回唾液分泌量と粘膜湿潤度との関係を調べるために、吐出法を用いて安静時唾液分泌量を測定し、口腔水分計ムーカス® (図1 ライフ社, 埼玉) による水分量の測定値と比較検討した。

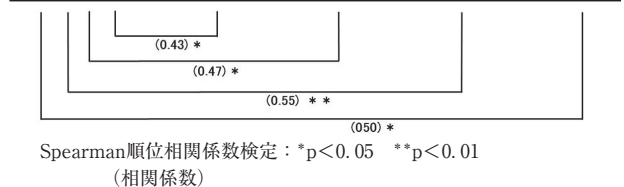
対象は実験の主旨に同意したボランティア23名(男性14名, 女性9名, 平均年齢24.3歳)とした。水分量はセンサー部に専用のセンサーカバーを装着した口腔水分計ムーカス®を用いて、舌粘膜(舌先端から約10mmおよび中央部の舌背部, 舌先端から約10mmの舌の裏), 頬粘膜(口角部から内側に約10mmの部位)の4か所を測定した。なお、測定は安静時唾液を採取し、その後、5分間安静にしてから各部位5回繰り返し行い平均値を算出した。安静時唾液分泌量と水分計の測定値との相関はスピアマンの順位相関係数を用いて検定を行った。安静時唾液分泌量と各測定部位の測定値の平均値を表1に示す。

唾液量の検査として吐出法が広く行われているが、唾液量と水分計の測定値に相関が認められたことから、口腔水分計の使用は小児や障がい者など吐出法の施行が困難な対象にも有用な方法と考えられた。しかし、舌背部での口腔水分計の測定値が29.0未満の場合は口腔内が乾燥状態であることが疑われる<sup>1)</sup>ことから、今回安静時唾液分泌量が正常値にも関わらず、舌尖において乾燥状態

が疑われる値を示したことは、測定者による測定誤差も考えられるので、センサー部の圧接方法など事前の訓練が重要だと思われた。また、測定部位間では、舌尖と頬粘膜、舌中央と舌下面、舌中央と頬粘膜との間に有意差が認められ、部位特異性がある可能性が示唆されたため、今後、舌尖以外の測定部位に関しても基準値の設定を検討する必要があると考えられた。

表1 安静時唾液量と各測定部位との比較

安静時唾液量 (ml/min)	口腔水分計値			
	舌尖	舌中央	舌下面	頬粘膜
0.4±0.2	27.8±3.2	27.3±2.9	30.8±2.3	30.8±2.2



参考文献

1) 福島洋介, 依田哲也, 荒木隆一郎, 村田翼, 北川善政ほか：口腔水分計を用いた口腔乾燥度の診断基準値の設定に関する臨床試験。日本臨床口腔病理学会総会・学術大会プログラム・抄録集 Vol. 21st : 106 - 107, 2010



図1 口腔水分計ムーカス®  
測定法：舌を突出した状態で、舌背の測定部位(先端から約10mmの舌背中央部)に垂直になるように一定の測定圧(200g程度)で圧接する。約2秒で音が鳴り測定値が表示される。